

1. 陽キャの俺が二回りも体の小さい幼馴染の大人しめ清楚系女子からのアナル開発調教でペットにされてチンコの持ち腐れになってる件について

倉橋陽介……20歳。大学生。身長は180cm前後、茶髪で少し犬系の顔。線が太くはないがそこそこのガタイを持つ。女の子とは仲良くなりやすい陽キャ。だがしかし恋人とは今まで長続きしてなかったようで……？

佐成綾妃……20歳。陽介とは幼馴染で同じ大学。身長は145~150cm。黒髪セミロングで肌は白い。大人しめの性格と思いきや……？

「可哀想にねえ……？あんなにいっぱい女の子たちに囲まれても、実際のあなたはこんな風に泣くしか出来ないんだから。ね、陽くん？」

「うあ、あ、あ〜っ……………♡」

「ふふ、きもちいい？お尻こんなにひくひくさせてちゃ、気持ちいいって言っているようなものだけれど…♡」

彼女のしなやかな指が、俺の腹の中を掻き混ぜる。ぐちゃ、ぢゅぷ、と聞くに耐えない音が響く中、楽しそうに歌うように彼女は俺に語りかけてくる。

「ゆっくりこうしてあげないと元気にならないもんね？もう女の子とえっちしようにも、こうしてもらわないと出来ないもんね？ふふ、可哀想、かわいそう…♡」

「お、あ♡」

可哀想、なんて宣いながら彼女は奥の一番気持ちいいところをぐりっと指で潰してくる。喉から引き攣った声が出ると共にふるふると揺れている俺の屹立からびゅっ、と薄い白濁の液が飛び出した。それを見た彼女はくすくすと、鈴が鳴るような声色で笑う。

「ふふ、かぁわいい……♡陽くんのおちんちん、もう"フツウ"じゃ使えないねえ♡」

うっとりとした声色で、愛おしいものを触るような手つきでふるふると揺れる陰茎を握り、指でつう……となぞる。そのまま鈴口をぐちゅりと指先で捌られ再度薄い白濁がぴゅうっ♡と小さな手をしどとに濡らす。きゅうう、と後ろが締まるのを自分でも感じて、中に入っている指の感覚が鮮明に伝わってきてどうしようも無い。最早母音だけになった声を楽しそうに、それは楽しそうに聴く彼女の姿を視界に捉えつつ今日も意識を飛ばしてしまった。

こんな歪な関係は、すぐ最近の話ではない。

2. 彼氏の前立腺開発始めました！

<キャラクター>

・トオル（彼氏）

25歳の会社員。身長175cm、体重70kg。体脂肪率が低く締まった体付き。

高校・大学と野球部で活躍していた。

社会人になった今でも運動する習慣があり、週に1度はジムやプールに通っている。

・カナ（主人公）

身長152cm、体重45kg。小柄なトオルの彼女。

トオルの後輩として同じ会社で働いていて、2人は会社公認の仲。

トオルの前立腺を開発することが最近の趣味。

先日初めてアナルに指を入れられたトオル。

カナが性行為を誘ってくるので、やや警戒しつつもシャワーを浴びてベッドへ。

そこには、大小さまざまな大人のおもちゃが用意されていた。

「もちろん全部トオル君のアナル開発用だよ」と笑うカナ。

だが、トオルは開発にやや後ろ向きである。

そこでカナは「今日やっても気持ちよくなかったら諦める」と宣言。

「その代わり、気持ちよかったらこれからも続けること」を条件に付ける。

根負けしたトオルは「約束だからな」と脚を開いた。

カナは小さな電動式エネマグラ（前立腺刺激用のおもちゃ）にローションを垂らし、挿入。

この前よりすんなりと入っていくことを煽りつつ、スイッチオン。

「内臓が揺さぶられてるような変な感じ」を抱くトオル。

トオルを横向きにし、カナが後ろから抱き着く。

膝でエネマグラが抜けないように押しこみながら、両乳首を責める。

「聞いていない」と怒るトオルだが、声が上ずっている。

カナがのぞき込むと、軽く勃起している。

「気持ちいいわけじゃない」と強がっているトオルだが、だんだん高い声が漏れ始めた。

膝を強く押し込むと、声も出せずに腰を震わせるトオル。

大量の先走りでシーツが汚れている。

気持ちよかったかと聞くと、トオルは悔しそうに「気持ちよかった」と答える。

トオルにディルドを挿入し動かしてやると、トオルは喘ぎ始める。

「素質あるんじゃない？」などと煽るカナだが、トオルは何度も体を震わせている。表情もトロトロになり、うわごとのように「気持ちいい」「イキそう」などと繰り返している。

ごりゅっと強めに前立腺を責めると、トオルは触れてもいないのに射精した。

「これからもっと気持ちよくなれるようにしてあげるね」と笑うカナ。

トオルは悔しそうではあるが、快樂で逆らえない。

翌日会社にて。

いつも通り凛々しく仕事をしているトオルだが、アナルにはカナの仕込んだ遠隔ローターが入っている。

カナのデスクに書類を渡しに来たタイミングで、スイッチを入れる。

トオルは慌てるが、カナは素知らぬ顔で「なんですかあ？」ととぼける。

出力を上げていくと、スーツの上からでも勃起しているのが見えるほど。

「続きは今晚ね」とカナは微笑んでスイッチをオフにする。

その晩、トオルはカナに（職場での件で）文句を言いつつも、素直に身をゆだねる。

「やっぱり気持ちよかったんじゃない」と笑うカナだが、トオルは否定しない。

昨日入れたものと同じような大きさのディルドをあてがうと、すんなりと奥まで入っていく。

トオルをいやらしい言葉で責め立てながら、ディルドを出し入れするカナ。

トオルがイキそうになったところで抜き、自身にペニバンを付けてトオルを犯し始める。

トオルは何度も「もうイってるからやめてくれ」などと言うが、カナは止めない。

ペニバンの先に前立腺の膨らみが当たっているのが分かる。

突かれるたびにトオルのペニスの先から透明な液体があふれ出している。

表情はだらしなく崩れ、「カッコイイ先輩」の面影はない。

ガツガツ掘られ、さらに乳首まで責められて、またしてもトコロテン射精してしまうトオル。

ぐったりしているトオルを横目に、カナはもう一回りサイズの大きなペニバンに手を伸ばす。

「次はこれで犯してあげようか？」と聞くと、トオルは力なく「お願いします」と言った。

3. 富豪の家のショタが住み込みのメイドのお姉さんに貞操帯で射精管理された上でペニバンでアナル犯されておちんちん役立たずにされてる件について

深夜。

屋敷の主とその家族たちはもちろん、庭園の薔薇さえも眠りにつくような夜半。起きているのは明日の支度をする仕事を割り振られたメイドたちと……斗真の世話役を任されている、彼女くらいのものだろう。

彼女は芳醇な香りのする薔薇をひとつ、指でつまんでいた。白いそれから漂う芳香は、昼間とはまた違った色香を見せる。明かりを片手に静かに階段を上り、二階の突き当りまで。

斗真の自室の扉をそっと開けると、彼女はベッドまで近寄った。彼の寝顔を、彼の寝息を確かめるため——などではない。香奈枝ははあ、と、少しだけ熱っぽい息を漏らしていた。くすりと笑い声をあげて、ベッドの丸みに口を寄せる。囁くような、吹き込むような、妖艶な口調で語った。

「だめですよお、斗真様。こんな時間まで起きていらっしゃるなんて」

「——っ、だ、だって」

「ふふっ、悪い子ですね。そんな悪い子には……お仕置き、しちゃいますよお」

メイドの口から放たれているとは思えない、傲岸不遜な言葉の数々。お仕置きだなど、従者が受けるのはまだしも、主に施すなんてもつての他だろう。しかし、香奈枝はまるで恐れている様子がない。むしろこの振る舞いこそ当然と言わんばかりに、じりじりとシーツを捲りながら語り掛けた。

「斗真様、ふふ、もしかしていけないことしちゃいましたか？ なんだか精のにおいがしますよ？」

「あっ……そ、それは、そんな」

「将来このお屋敷を継がれる方だというのに、そんなにふしだらでいいんですか？ そんな悪いおちんちんは、お仕置きしなきゃだめですね」

「ううっ、まって、香奈枝」

香奈枝がシーツをはぎ取ると、そこには頬を赤らめた斗真がいた。膝をもぞもぞと擦り合わせて、頬を赤らめている。吐く息は、その紅潮の全てを吐き出してしまっているかのように、熱い。興奮を隠すことすらできない幼い少年の身体は、白い肌を薄桃色に染め上げながら、ひそかに昂っていた。

「香奈枝があんなこと、言うから」

「わたくしのせいになさるのですか？」

「ああ、まって、香奈枝……！」

「汗をかいていらっしゃいますね」

香奈枝が斗真の寝間着のリボンに手をかけ、力を込めて引っ張った。彼の純情の勲章と

もいえる胸元の大きなリボンが、しゅるりと音を立てて解けていく。これがなくなってしまえば、小さなボタンがいくつか彼の素肌を守るのみだ。首から垂れさがるリボンと、剥き出しのままの白い脚。見下ろすようにしながら笑う香奈枝の瞳には、愛も変わらず、愛情と慈しみが湛えられていた。その抱擁するような眼差しは、昼間と何も変わらない。

しかし、圧倒的に変わってしまったものが一つあった。香奈枝の瞳の奥に、確かな情欲の火がともっている。斗真のことを狙う、妖しげな獣のような姿。一步一步彼女が近づいてくると、斗真の心をふたつのものが満たす。逃げなければ、食べられてしまうという恐怖。そしてもうひとつは、このまま彼女に食べられて、安直な幸せを手に入れたいという、浅ましい欲望。嗜虐の色さえちらつかせる、もはや凶悪といっても差し支えない香奈枝の二つの目が、斗真の心を捉えて離さなかったのだ。彼女の手がボタンに伸びる。斗真はそれを拒絶するかのように身を震わせるも、香奈枝が許してくれるはずはなかった。彼女がひとつ、ぷつりとボタンを外す。たったそれだけのことで「ああっ」と声を漏らし、斗真は恥辱に頬を染めながら、同時に押し寄せる期待の波にさらわれていった。

白い脚はシーツに擦れて、そのざわめくような衣擦れの感触でさえ、彼の若く貪欲な感性は快樂として拾い上げてしまう。

——早く、はやく触れて。

そんなことさえ思っている斗真を弄ぶように、香奈枝はゆっくり、ゆっくりとボタンを暴いていく。まるで焦らすようなその所作に、斗真は懇願するような視線を向けてしまった。いたぶられる喜びを知っているかのような、少年におよそ似つかわしくない視線を受けて、香奈枝の胸の奥はきゅうんと爆ぜた。愛はあるのだ。慈しみはあるのだ。示し方が、少し残酷なだけで。

彼とメイドの熱く甘い、秘密の逢瀬はこれが初めてではなかった。少年はその幼さに反して、既に知ってはいけない快樂を刻みこまれていた。拒否をするには、彼の脳内は桃色に塗りつぶされていたのだ。

「ああっ、だめ、だめだよ、香奈枝……」

今日こそは我慢しないと。今日こそは避けないと。今日こそは、今日こそは——そんな言葉ばかりが、頭の中をぐるぐると回る。

彼女の手を逃れなければと頭の中では思うのに、その指が、その胸が、自分に触れる感覚を思い出してしまえば、脳内にある桃色の記憶が「その手に触れればいい」と囁くのだ。香奈枝の微笑みは美しいが、同じくらい嗜虐的で斗真をぞくぞくとさせる。

「ダメだなんて、素直じゃないですよ」

「ひゃあっ、ううっ」

寝間着の胸元をはだけさせた香奈枝は、そっと指を伸ばして肌をなぞっていく。薄い首、薄い鎖骨、薄い胸元。熱を味わい、辿るように、少しずつ下ろしていく指の先。まるで火でも灯っているかのような熱い錯覚を覚えて、斗真はほうと息を吐いた。たったそれだけのことだというのに、彼の肌は行為の熱を思い出して、じくじくと疼く。もどかしさと既

に感じる気持ちよさに挟まれて、死んでしまいそうになりながら、斗真は必死に香奈枝を見上げていた。

「ほら、素直になってくださいね」

そして、彼の薄い胸についている先端の飾りを、爪でそっと引っ掻いた。

「ひゃうん！」

その瞬間、少年は座ったまま身体をぐいと反らせ、胸を突き出すようにしながらびくびくと痙攣した。閉じることのできない口が哀れにさえ見える。目を見開き、口をだらしなく開きながら、香奈枝に与えられたほんの僅かな刺激にさえ、数十秒感じている。

「ふふっ、すっかり敏感になっちゃいましたね」

「ああっ、香奈枝……僕」

「もっと反応してください、もっと声を出して？ さあ」

「んんっ、ふああっ、ひゃあ」

かりかりと、爪の先で乳首を弾くように刺激する。くるくると弧を描くようにこねくり回したり、突然ぎゅっと力を入れて摘み上げたり。香奈枝による緩急自在の攻め手に耐えることもできず、斗真はがくがくと項垂れた。ベッドにぱたりと倒れ込み、肩を揺らしながら荒い息を吐く。その下腹部についているものが緩やかに隆起しているのを見て、香奈枝は「あらあら」と声を上げた。

「ここもご立派……」

「ああっ、や、だめえ！」

「斗真様、本当に女の子みたいですわね」

寝転がって何の抵抗もできなくなった斗真の、寝間着のボタンを全て外す。まるで赤子の世話のようで、それもまた彼の羞恥を煽った。香奈枝はお構いなしで作業を進めていき、彼の腕から寝間着の袖を抜いた。下着だけを身に着けた少年を見下ろし、香奈枝は満足そうに笑う。

「乳首だけでこんなに感じちゃったんですか？ 情けないですね」

「ううっ」

「ね、斗真様、射精したいですか？」

香奈枝はそう言いながら、容赦なく彼の性器を下着の上から握り込んだ。斗真は恥ずかしさが勝るのか特に何も返すことはなく、腕を顔に押し当てるようにしながらうんうんと唸っている。香奈枝はそれを見て、更に笑みを深めた。ちらりとその笑みを見た斗真は、彼女の笑みに隠れた嗜虐性を感じてしまい、ぞわりと腰を震わせた。

射精したいかと更に追い打ちをかけて尋ねる香奈枝は、更に強く斗真の性器を握りしめた。下着越しとはいえ感じる体温、手のひらの凹凸。生ぬるい快感に、膝を笑わせながら何度も頷く。

「ふふ、ダメです。射精して気持ちよくなりたいかもしれませんが、我慢してくださいね」

「そ、そんな」

「はい、出しちゃだめですよ」

「ま、まって……うあああ！」

香奈枝は一方的に我慢を命じると、自分は好きなように斗真の性器を弄びはじめた。まるで主従が逆転してしまったかのような錯覚に陥りながらも、斗真は「彼女の言うことを聞かなければ」という使命感に襲われて、必死に気持ちよさをやり過ぎそうとする。しかし赤く腫れた彼の性器は、若々しさもあり、すぐに勃ち上がってしまった。下着の一点にじわりとした染みができて、我慢汁を吐き出していることを伝えてくる。

「悪いおちんちんですね。すぐ勃起しちゃうんですから」

「うああ！　だ、だってえ、あああっ」

「ふふふっ、情けない声。本当にこの家の跡取りなんですかあ？」

「うあんっ、ひやあっ、あおっ」

香奈枝は散々弄んだ性器を離すと、下着の染みをぐりぐりと指で押す。そっと指を遠ざけると、着いてくるように糸が伸びて……その様子を見ていた斗真は恥ずかしそうに身を振った。その動きに合わせる様にして下着を取り払った香奈枝は、ベッドサイドから瓶のようなものを取り出す。中をぐちぐちとかき回すようにすると、斗真はその様子を見て顔を赤らめた。斗真には、その光景は見覚えのあるものだったのだ。今日にいたるまで、何度も、何度も、こうして彼女は瓶の中身を掻きまわし、それを使って自分を犯してきた。きっと今日も、犯されてしまうに違いない。

斗真の瞳には恐れの色が浮かんでいた。しかし、それと同時に確かな熱の昂りが宿っていることも気付いてしまった。その快楽を知り尽くしてしまっているのだ。心ではいやだいやだと思うようにしていても、身体は分かり切っている。彼女が自分に、いかに快楽を与えてくれるのか。望むものをくれるのか。あるいは、くれないのか。滅茶苦茶に焦らして、滅茶苦茶にしてくれるのか、を。今日の昼間、彼女に「お礼をしなくてはなりませんね」と言われてから、斗真の頭の片隅には、ずっと待ち望んだ今夜があったのだ。それは否定の仕様のない事実。実際彼は既に、香奈枝に尻を突き出すようにしながら、全身を痙攣させるようにして待っていた。

「ほんと、いけない子ですね……」

4. ベッドを照らすのは月明り

ベッドを照らすのは月明りだけ。

淑やかで瀟洒な寝台の上で、メイドは主人を見下ろしていた。

「今夜もキチンとオマンコ洗ってきましたか？」

ニコリと嗜虐的な眼差しの先では、無様に脚を開いている全裸の主人の姿。本来ならば抱かれる側の女が男に対しするような、局部を晒す屈服姿勢そのものだった。

「ちゃんと綺麗になったか見せてくださいよ」

メイドは含み笑いながら主人のアナルに顔を寄せる。そのしららかな指先で、肉色の孔をくぱりと開口させた。熟れた赤色が露になる。ひくつく熱い肉にフッと冷たい息をかければ、孔がいっそうわなないた。

「ここ、私に犯されること考えながら綺麗にしてたんですか？ とんだド変態ですね」

メイドの蔑むような言葉に、孔の上に在った男根が反応した。メイドに孔を見られているだけで勃起してしまっている。彼女はそれを見逃さず、先走りを頂いた亀頭に容赦なく鋭いデコピンを喰らわせる。

「うぐうっ！」

「メイドにオマンコ見られてるだけで変態勃起しているなんて、最低ですね」

顔を上げるメイドは、片手に持った『いつもの』貞操帯を主人に見せつけた。それは合図だ。「今からお前をメチャクチャにしてやる」という、視覚的ファクターである。パブロフの犬のように、『それ』を見ただけで主人の勃起陰茎にはつらいほどに血が集まった。メイドによる躰の賜物であった。

「毎晩私にオマンコ犯されてメスイキ決めまくってるご主人様に、おちんちんなんて必要ありませんよね」

慣れた動作だった。有無を言わず、メイドは主人の陰茎を貞操帯で封印する。そして「必要ない」の言葉通り、鍵を一瞥することなく後ろにポイと投げ捨ててしまった。カラン——鍵が床のどこかに落ちた音。笑みを崩さないメイドは、その白く美しい手に黒いゴム手袋をはめていた。イボ付きのゴムグローブは、肉孔を虐め抜く為の造詣をしていた。指にまとわりついたローションで、月明かりにてらてらとしていた。その光景は、クラシカルで清楚なメイド服とはあまりにも対照的であった。

「オマンコが裂けちゃったらかわいそうですから、ちゃんと慣らしてさしあげますね」

そう言って、メイドはゆっくりとした動作で、主人のアナルのふちにローションを塗りつけていく。指先だけを浅くつぶつぶと沈めて、肉をひくつかせて弄ぶ。

「ふふ……かわいい縦割れオマンコですね。とろとろに濡れて、物欲しそう…」

言葉終わり、主人のアナルへ中指を挿入する。ぬぷぬぷと、段差とイボのついた指が飲み込まれていく。「うううっ」と呻く主人の顔を見つめながら、焦らすように出し入れを繰り返す。

「私の指、わかりますか？ ご主人様の縦割れオマンコ、手マンされて中がきゅんきゅんしていますよ。……出し入れだけじゃ足りなさそうですね？ ご主人様は淫乱ですからね。じゃあ、前立腺をたっぷり虐めてあげますね」

薬指も挿し込まれる。二本の指が、主人の前立腺をぐりぐりと押し始めた。イボが肉に食い込み、主人は強い快樂に腰を浮かせる。

「うッ、うううううッ」

「ご主人様はここが大好きですもんね。女の子の指できもちよくなれて嬉しいですね、よかったですね」

ぐちゅぐちゅと指とアナルでいやらしい音を立てながら、メイドが言う。ひときわ強く前立腺を抉り上げられると、主人の身体がびくと震えた。

「ひいっ！ いいいいいいいっ」

「……メスイキするときは『メスイキさせていただきありがとうございます』、ですよ？」

「ひっ、い、あっあっありがとうございます、メスイキさせていただきありがとうございますっ！」

「ちゃんとお礼が言えてえらいですね、えらいこにはイイコイイコしてあげますね」

主人が達していても、メイドが責める手を緩めることはなかった。むしろいっそう、人差し指をもつきこんで、まとめた三本指で主人のアナルをじゅぽじゅぽと犯し始める。

「ぎっ、い、ああああ！ ありっ、ありがとうございますっ、ありがとうございますッ、メスイキきもちいいですありがとうございますッ！」

成人男性の情けない声が寝室に響く。みっともなく啼きながらドライオーガズムを繰り返す主人に、メイドはうっそりと目を細めていた。

「きもちよさそうですね。……でも、そろそろ奥が切ないんじゃないですか？」

ずるりと指が引き抜かれていく。全ては引き抜かず、中頃まで埋めたまま左右に開いた。伸ばられた中をまじまじと見る。そこはメイドの指による責めの余韻がまだ残り、ひくひくと媚びるように震えていた。

「真っ赤に熟れて、すっかり非処女のオマンコですね。物欲しそうにひくひくしています、もっと奥に太いの欲しいんですか？」

それは言外に、主人へ「自らの口でどうして欲しいのか言ってみろ」と命じているのだ。だから男は情けなく声を震わせて、メイドに懇願する。

「お……お願いします、変態奴隷マゾマンコをオチンポでめちやくちやにレイプしてください」

「ふうん……男の人なのに、おちんちんよりオマンコで気持ちよくなりたいんですか？ 変態ですね……」

メイドが冷ややかに一瞥するのは、貞操帯の中に閉じ込められたまま、憐れなほどカウパーを垂らした男根だ。

「貞操帯檻の中でオチンポしくしく泣かせて、可哀そうなご主人様……このまま一生射精

禁止の去勢マゾにしてあげましょうか。男の子としての尊厳を完全に取り上げて、勃起も射精も一生禁止してあげます」

指を引き抜く。孔と指先をローションの粘った糸が繋いだ。「お願いします」と主人が言うので、メイドは優しく嗜虐的に微笑む。

「お望み通り、貞操帯おもらしでしかイけない底辺マゾに舐けてさしあげますよ」

グローブを外して、彼女は愛らしく小首を傾げて。

「ほら——今からご主人様のオマンコ虐めてさしあげますから、早く土下座して交尾の懇願をしてください。ちゃんとおねだりできたら、ご褒美としていっぱい虐めて、貞操帯越しにおもらしさせてあげますよ」

5. 旦那様／お父様の命日

ねえやがゆっくりと開けた箱の中を首を少し伸ばしてのぞき込むと紅色のベルベットの布の上に見たこともない金属細工がいくつかおいてあった。

太さ違いの輪がいくつかと、太さや長さ、形違いの長い棒のようなもの3本。

いったいなにに使うものかわからず触ってみようと手をのばしてみたかったが、手を繋ぐねえやの下着がそれを止めた。

「ねえや、これはなににつかうものなのですか……？」

「こっちの輪っか状のものは勝手にいじったりするのを邪魔する道具ですよ。

自由に女性の方相手に性交できなくなっちゃうんです。」

短い棒のようなものがついた輪っかにふくらみとおちんちんを通したあと、飾り彫りのはいった輪っかをこんどはおちんちんの棒の部分に通す。

「この彫りの部分、よく見てくださいな。

坊ちゃんの紋が入っているんですよ。」

そう話しながら上についた小さな穴にねえやは根元の輪っかの上についていた棒をくぐらせる。

「ずーっとこれをつけてたら、坊ちゃんのここに痕が……ついちゃうかもしれませんねえ。」
くすくすとねえやが笑いながら、丸いケージみたくなっていて、内側に長い棒状のものがついたものを手に取った。

「見てくださいな、坊ちゃん。ここの長いストローみたいなのが

今から坊ちゃんのおちんちんの先っぽに入りますよ。

坊ちゃんは初めてですものね。

入りやすいようにたっぷり潤滑油を塗っておきましょうね。」

ねえやが入り口を開くようにおちんちんの先端をキュッと押す。

とろりとした何かは僕のおちんちんの先とねえやの手にもってるものにたっぷりと塗られる。

「危険ですから、決して動いてはなりませんよ。」

「な、なにを……ヒッ……！」

ゆっくりと穴の先からおちんちんの中へとくるくると回しつつゆっくりと透明なホース棒が挿入されていく。

「やっ、……ねえや、変です……！そこは出すところでっ……！」

ひっ……いっ……いれるところじゃないから！！」

「昔旦那様が言っていたのですが、これがあると抜けづらくなるんですって。

んっ……よいしょつと……。」

「はっ……、ね……えや……苦しいっ……。」

カチリという音とともに金属細工が施錠されて器具により無理矢理おちんちんが短く固定

される。

「これで、坊ちゃんは自由に射精できなくなってしまいました。

勝手に弄っているのを見つけたらおしおきですからね。」

ねえやは身につけていたネックレスを外し、今施錠した南京錠の鍵を通してまた身につけた。

服に隠れて見えなかったねえやがいつも身につけているネックレスの飾りが鍵だったことに気がつく。

じっと見つめている僕に気がついたねえやがネックレスを見やすいように持ち上げる。

「こちらの金色の鍵が旦那様が使っていた貞操帯の鍵なんですよ。

2代にわたって鍵の管理をさせていただけるなんてとても光栄なことですわ。」

目を細めて楽しそうに笑うねえやに、なぜか下腹部へと熱が集まっていくのを感じた。

「さ、今日はここまでにいたしましょう。お風呂に入ってゆっくり寝ましょうね。」

一緒にお風呂へ入ろうとするねえやを押しとどめて、久しぶりに一人でお風呂に入る。

「どうしてこうなってしまったのでしょうか……。」

頭からぬるいシャワーを浴びながら僕は頭を抱える。

ぼんやりとする頭で先ほどまでの出来事が何度も浮かびあがるが夢だと思いたい。

しかし、ずっしりとした下腹部の重みとが現実なんだと自覚させた。

足下を見ると金属の檻の中に僕のおちんちんとふくらみが窮屈そうに押し込められている。

「僕は、ねえやとずっと一緒に居たかっただけなのに……。」

この金属細工をつけるときの楽しそうなねえやの姿や、

間近で見たねえやのふだん見れない場所を思い出すと

熱を帯びておちんちんが大きくなろうとする。

「ひぎっ……！」

すると金属細工の隙間に肉が食い込んで痛みを感じた。

金属細工の隙間に指を差し込んで外そうとするが、指は入らず外せない。

それどころか押されたことによってより痛みが増す。

「痛い……、やだ、こんなのやだ……。外したい……。」

こんな痛いものをずっとつけていなくてはいけないことに対する恐怖感。

自分のものが自由にできない気持ち悪さや苛立ちで心がざわめく。

そしてなぜかこんな状況にどこか興奮している自分に気がつきたくなかった。